



新潟市歴史博物館
博物館ニュース

帆樫成林

Vol.51

帆樫成林

—はんしゅうせいりん—

新潟市歴史博物館 博物館ニュース vol.51

「帆樫成林」とは？

帆柱が林のように多く立つ様子を表現した語。
人が多く出入りする活気ある「みなと」をイメージしました。



「合法小路」(脱奔小路か)
長谷川雪旦「北国一覽写三」国立国会図書館所蔵
いまの西福前通に、脱奔小路と呼ばれ、婚嫁が通りに面して店先に顔を並べる張店(はりみせ)があった。店の他、露店のまんじゅう売りや畑のようすがよく描かれている

CONTENTS

特集1	新潟市文化財 旧小澤家住宅の取り組みについて	P.2~3
特集2	生誕320年記念特別展 五十嵐俊明 いからししゅんめい	P.4
歴史さんぽ	カトリック新潟教会聖堂	P.5
おすすめの一冊	『世界美術双書008 日本の南画』	P.5
特集3	みなとぴあ白根絞り展	P.6
館長日記	俊明と湊祭り	P.7
収蔵資料紹介	伊藤小平作「寄木団扇」	P.7

■ 帆樫成林「はんしゅうせいりん」第51号
■ 編集・発行／新潟市歴史博物館 〒951-8013
■ 印刷／株式会社ウエザップ
■ 発行日 令和2年12月16日
■ 新潟市中央区柳島町2-10

【たいけんのひろばプログラム】

楽しみながら、遊びながら、昔のことを学びます。

日時	タイトル	内容	申し込み・対象・参加費
12月19日(土)・20日(日) 14:00~15:00	押絵のクリスマス飾りづくり	押絵の技法で、クリスマスにぴったりの壁飾りを作ります。	どなたでも申し込み不要・当日先着5人(各日)・無料
2021年1月17日(日) 14:00~15:00	布をおってみよう	空き箱をつかったかんたんな織機で、裂き織りのコースターを作ります。	どなたでも申し込み不要・当日受付先着8名・無料
2021年1月24日(日) 14:00~15:00	江戸紋切りを楽しもう	折り紙を折って、切って、伝統的な文様を作ります。	どなたでも申し込み不要・当日受付先着10名・無料

お申し込みは、電子メール・往復はがきで当館まで。申し込み締切日は、当館までお問い合わせください。

現在開催中の企画展

みなとぴあ歴史発見プロジェクト 「生誕320年記念特別展 五十嵐俊明」

五十嵐俊明は、新潟湊に生まれた江戸時代中期の絵師です。新潟で後進育成に尽力しながら、書や漢詩にも優れた教養をもって関西の文化人と対等につきあい、晩年には勅命を得て天皇に画を献上する栄誉も得ました。江戸後期に活躍する地方絵師たちの先駆的な存在であり、新潟の美術史を語る上で欠くことのできない人物です。俊明生誕320年を記念した本展覧会では、新潟で大切にされてきた作品に加え、関西とのつながりを示す作品などを広く集めてご紹介いたします。

会期	2020年11月14日(土)~2020年12月27日(日)
	前期:11月14日~12月6日、後期:12月8日~12月27日
休館日	毎週月曜日
観覧料	一般: 500円・前後通し券700円 大学・高校生: 300円・前後通し券450円 小・中学生: 無料 ※20人以上団体料金(2割引)
主催	新潟市歴史博物館(芸術文化振興基金助成事業)
共催	新潟日報社・BSN新潟放送局 特別協力 五十嵐俊明展準備会
後援	朝日新聞新潟総局・毎日新聞新潟支局・読売新聞新潟支局・日本経済新聞社新潟支局・産経新聞新潟支局・NHK新潟放送局・NST新潟総合テレビ・TeNYテレビ新潟・Ux新潟テレビ21・エフエムラジオ新潟・FM KENTO
協賛	みなとぴあ歴史発見プロジェクト参加団体(巻末に記載)

次回企画展

白根絞り展

会期	2021年1月16日(土)~1月31日(日)
休館日	毎週月曜日
観覧料	無料
共催	サークルしろね絞り

収蔵品・新収蔵品展

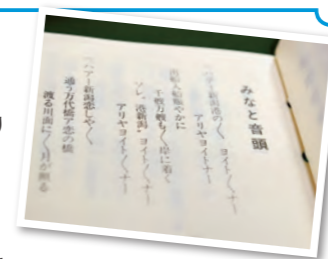
会期	2021年2月13日(土)~3月28日(日)
休館日	毎週月曜日、2月24日(水)、3月23日(火)
観覧料	無料

みなとぴあ便り

以前から不思議に思っていることがあります。先月終了した「にいがたの昭和展」の展示品の中に、料亭などの宴会席でお客様に配られていた「歌本」がありました。古町芸妓さんがお座敷で披露する新潟の民謡が載っているもので、さすが港町だけあって港を唄った曲が多いようです。その「歌本」の中に「新潟甚句」「新潟小唄」「新潟音頭」「新潟港踊り」等の有名な民謡とともに必ず載っている「新潟みなと音頭」という民謡があります。最年長の元古町芸妓さんに確認しても知らないとのこと。

何とか音源は探せたのですが踊りが分かりません。たまたま撮ってあった映像が奇跡的に出てくることを期待しているのですが。

何故忘れられてしまったのか不思議です。とてもノリのいい曲なので、いつかこの幻(?)の民謡が復活し、古町芸妓さんが唄い踊る姿をお座敷で鑑賞したいと思っています。(企画普及課 伊藤)



- 展示解説会
日時: 毎週日曜日 各回13時30分より30分程度
会場: 本館1階企画展示室 申し込み: 不要 ※当日観覧券が必要
- ナイトミュージアム
日時: 12月19日(土) 17時~18時
会場: 本館1階エントランスホール 定員: 約50人(先着順) ※立ち席を含む
申し込み: 不要 ※当日観覧券が必要
- ワークショップ「松林図屏風づくり」
日時: 12月22日(火)~27日(日) 13時30分より60分程度
会場: 本館1階たいけんのひろば 定員: 各日20人(当日先着順)
申し込み: 不要 参加費: 無料

博物館講座

当館学芸員が調査・研究をすすめているテーマについて、毎月第4日曜日にお話します。

【時間】 13:30~15:00
【会場】 本館2階セミナー室
【申込】 要事前申し込み 60名
【資料代】 100円

- ◆ 12月の講座: 12月20日(日) 申し込み受付開始日: 12月9日
江戸時代絵画の楽しみ方
講師: 大森慎子
- ◆ 2021年1月の講座: 1月24日(日) 申し込み受付開始日: 1月6日
明治・大正期、新潟市で働く人びと
講師: 鈴木彩也花
- ◆ 2月の講座: 2月28日(日) 申し込み受付開始日: 2月10日
小池上文書を読んでみる
講師: 若崎敦朗

お知らせ

■ 2021年2月1日~8日まで施設整備のため休館します。

旧小澤家住宅企画展

- 「羽子板」展
会期: 12月19日(土)~1月17日(日)
入館料: 一般200円
小中学生100円(土・日・祝日は無料)
- 「ひな人形とからくり人形」展
会期: 2021年2月20日(土)~3月21日(日)
TEL: 025-222-0300

編集後記

今回は旧小澤家住宅の活動について特集しました。物販にも力を入れている旧小澤家住宅では、コロナ禍を利用してマスク販売をするなど時世の流れに合わせて事業を行っています。当館でも、おうち時間に博物館を楽しんでもらえるよう「おうちみなとぴあ・おうちミュージアム」というコンテンツをホームページ上で提供しています。コロナ禍でも施設に興味を持ってもらえるような取り組みを続けていければと思います。(鈴木)

お問い合わせ・申込みは博物館まで…

新潟市歴史博物館 みなとぴあ
住所: 〒951-8013 新潟市中央区柳島町2-10
Tel: 025-225-6111 Fax: 025-225-6130
E-mail: museum@nchm.jp http://www.nchm.jp
【休館日】 毎週月曜日、祝日の翌日・年末年始(12/28~1/3)
【開館時間】 (4-9月) 9:30~18:00 / (10-3月) 9:30~17:00

2020. 8 現在

みなとぴあ歴史発見プロジェクトは、こどもからおとなまで幅広く、みなとまち新潟の歴史に親しみ、自ら歴史を発見する喜びを知ってもらい、開港150周年を迎えた新潟の街をみんなで盛り上げていこう!という事業です。

「みなとぴあ歴史発見プロジェクト」は、下記の地域の企業・団体のみなさんからご協賛をいただいています。

旧小澤家住宅の取り組みについて

旧小澤家住宅 館長 鷲尾雄二

旧小澤家住宅は、江戸時代後期から新潟町で活躍していた商家・小澤家の店舗兼住宅です。江戸末期から明治末にかけて築造された建物、庭がほぼ当時の姿のまま残り、新潟町の町家の典型的な姿を見ることが出来ます。

1 旧小澤家住宅の活動

新潟市の旧小澤家住宅条例は、第一条で「旧小澤家住宅を活用し、みなとまちとしての本市の歴史、生活文化、観光資源等に関する情報の提供等を行うことにより、みなとまち新潟に対する市民の理解を深め、市民相互の交流を推進し、もって市民文化の向上及び地域の活



写真1 旧小澤家住宅前景

性化に寄与する」と、設置の目的を定めています。
これを受けて、当館は次のような様々な事業を行っています。

①展示
常設展示では、小澤家の来歴や館の概要、「みなとまち新潟」の歴史や生活・文化をグラフィックパネルや映像で紹介しています。

企画展は、毎年度十本前後開催しています。小澤家から寄贈された文書や家具、食器、衣類等も活用しながら、小澤家のことや、明治から昭和の人々の生活の様子、文化を紹介する展示（小澤家の



写真2 令和2年度 新潟仏壇工芸展

人々展、屏風展、端午の節句飾り展、着物展、旅行展など）を行ったり、「みなとまち新潟」に関する展示（湊祭展、新潟築港展、大新潟湊展など）、それ以外の展示（水道展、海のゴミ展）など、様々なテーマで企画展を開催しています。

また伝統産業の支援も当館の使命の一つであり、新潟漆器や新潟仏壇の展覧会を度々開催し、新潟の伝統工芸の技術の高さ、製品のすばらしさを来館者に紹介しています。

②講座や体験イベント

掛軸講座や古文書講座、庭木の手入れを学ぶ庭園講習会等を開催するほか、企画展をさらに楽しむための講演会や体験会も開催しています。小学校四年生二〇人ほどが当館に一日泊り「昔前の生活を体験する「旧小澤家住宅に泊まろう」は毎年夏の人気企画です。季節に合わせて、正月飾り、クリスマス飾りの製作体験等も行います。

当館は季節毎のしつらえを大切に、施設を楽しんでもらえるようなイベントも開催しています。建具や屏風の入れ替え、掛け軸の掛け替え、山野草の展示等を行い、来館者に季節感を大事にした日本の伝統的な住まい方を見ていただいています。そして一年を通して様々な



写真3 オリジナル商品もある物販コーナー

館でしか買えないオリジナル商品もあります。北前船がデザインされた手ぬぐいやトートバッグ、Tシャツ、「まるこぼろ」（焼き菓子）などは来館記念のお土産として好評です。
新型コロナウイルスの感染拡大で使い捨てマスクが手に入りにくくなっていったところ、当館の手ぬぐいを使ってオリジナルマスクを製作し販売を始めました。木綿製で着脱感が爽やか、これまで五〇枚くらい売れています。

2 コロナ禍のなかで

昨年十二月に初確認された新型コロナウイルスは、瞬く間に世界中に拡がりました。感染が拡大する中、当館も大きな影響を受けています。当館では新潟市の定めたガイドラインに従って感染予防対策を行い、参加者の密閉、密接、密集（三密）が生じそうなイベントはこれまで中止したり、規模を縮小したりして開催しています。講座や体験会は定員をほぼ半減して募集しています。四、五月は臨時休館もはさみ来館者が一桁〜十数人の日が続き、二カ月間の来館者数は前年度比二割に落ち込みました。コロナ対策を行いつつも、積極的に集客をしていかなければなりません。

夏至祭は夜間まで様々な小イベントを盛り込んだ、お酒も飲めるイベントでしたが、今年は、飲食物の販売を中心に夏至の日の昼間だけの「夏至祭ミニ」として実施しました。当日は天気にも恵まれ二七二人もの人出で賑わいました。お



写真4 令和2年8月のおやつの日

客様も本当に楽しそう、長らく自粛気分が続く中で、息抜きの重要性を痛感しました。

夏至祭ミニに大勢のお客様からおいでいただいたことに意を強くして、七月から毎月一回「おやつの日」と銘打って、かき氷や焼き菓子、ケーキ、ノンアルコールカクテル、小澤家オリジナルブレンドコーヒーなどを販売し、離れ座敷で飲食できるイベントを始めました。新潟漆器の展示や民謡のゲリラライブも併催し、毎回一〇〇〜二〇〇人のお客様に足を運んでいただいています。物販のお店屋さんの発信力もあって当館に初めて来館されるお客様も多く、宣伝になっています。

国のGO TOトラベルの東京発着の適用開始などで、九月下旬以降お客様

外出に対する雰囲気が大きく変わったように思います。当館への遠来のお客様もだいぶ増えてきて、十月の来館者数は前年度比九割まで回復しました。

3 運営の特徴

当館の運営の特徴として次の点が挙げられます。

①職員が少人数でネットワークが良い
例えば今年の梅雨時のミニ展示「カエル展」は、仕事中的ふとした会話から生まれたものです。小澤家や当館職員、館のボランティアスタッフ、知人に声をかけ、カエルがデザインされたペン皿、手ぬぐい、蒔絵、置物などを持ち寄り、館内に展示しました。予定になかったミニ展示会がコストゼロでたちまち出現し、梅雨明けの展示撤収までお客様に楽しんでもらいました。

②大勢の理解者、協力者に支えられている
企画展の趣旨に賛同してくださる市内の収集家や市民の皆様には様々な貴重な展示物を出品いただいています。今年開催した和時計展、ふるしき展、着物展でも多くの展示物をお借りしました。

また講習会などで、無料やわずかな謝礼で講師を務めていただくこともありますし、当館のボランティアガイドもイベントの運営を手伝ってくれます。こういった協力があって初めて、多くの事業が実施可能になっています。当館の活動に対して理解と愛情をもっていただいていることに心から感謝を申し上げます。

イベントを行い、賑わいを創り出しています。

満開の藤棚を眺めながらの藤見煎茶会や、二日にわたり夜までイベントを楽しむ夏至祭。和の風情に包まれながらお酒を味わっていただく「ワインの昼べ」や「秋の酒づくし」等も好評です。「秋の大文化祭」はお座敷ライブや講演、絵画の展示、落語など盛りだくさんの内容で開催しています。

③物品販売

物販も大事な取り組みです。新潟漆器やふるしき等の市販品を扱うほか、当

③地域と連携している
下町地域の住民団体「旧小澤家住宅周辺の歴史的町並みを考える会」と連携して、通りのライトアップを行ったり、地元の下本町商店会の実施するイベントに参加したりしています。また先述の「旧小澤家住宅に泊まろう」で食事準備など手伝ってもらっている人は地元の方々です。今年はコロナのため開催を中止しましたが、毎年手伝っていた方から「残念ね」「来年はぜひ開催を」との言葉をいただき、ありがたく、心強く感じた次第です。

4 これからの運営

当館は今年十一月十四日に来館者累計が十五万人に達しました。開館以来九年半での達成で、年間約一万六千人のお客様においでいただいていることになりました。これまで館を支えていただいたボランティア、支援者・協力者、また地域の方々にあらためて厚く御礼を申し上げます。そして足をお運びいただいた市民の皆様や県内外のお客様に心から感謝を申し上げます。

これからも施設をしっかりと守り、貴重な文化財を次代へと良好に継承できるよう努めるとともに、企画展やイベント等を通じて大勢のお客様に楽しんでいただけるよう努力してまいります。
(わしお ゆうじ 館長)

「新潟にこんな絵師がいたとは」。
十二月二十七日まで開催の展覧会で紹介する江戸中期の絵師五十嵐俊明は、新潟ではもちろん、全国的にも驚きをもって見直される絵師だと思えます。

日本美術史においては、南画（文人画）の大成者である池大雅の貴重な若描きの作品が、俊明へ贈られたものだというだけで、わずかにその名が登場するだけでした。しかし、四十五歳の時に「法眼」という天皇から授けられる位を受け、七十八歳の時には勅命で天皇へ画を献上する榮譽を得ており、また、いまなお関西でその名が知られ作品が流通しています。

江戸後期に出版された画家伝『画乗要略』は、現在も美術史研究における重要な資料の一つですが、俊明が「法眼」を得て帰郷後、四〇年もの間、画を研鑽する「棲」から出なかつたという逸話を紹介しています。それにより新潟でのみ活動したように思われますが、そうであれば俊明の名声は説明がつきません。実際に、宝暦十二（一七六二）年には兵庫高砂の豪商三浦迂斎が新潟に立ち寄って俊明と親交を深めており、明和二（一七六五）年には俊明自身が大坂へ赴いたらしく、関西との交流が続いていたことがわかります。

しかしながら、俊明の驚くべき点
は、あくまで新潟を本拠地としたこと
です。地方から出て江戸や京都で活躍
した絵師はいませんが、俊明は新潟にい
ながら世に名を馳せました。地方で藩
のお抱え絵師などにもならずやっとい
くことができたのは、当時活況を呈し
ていた新潟湊の繁栄と文化があつてこ
そでしょう。俊明と高砂や大坂などと
のつながりも、湊町同士によるところ
が大きかつたのだらうと思われま
す。

とはいえ、俊明の作品に魅力がなけ
れば、そのつながりは意味をなさな
かつたでしょう。俊明の画は、鮮やか
な色や緻密な造形に目を奪われがちな
現代では、一見地味にも見えます。し
かしその俊明
の画が当時に
は思つた以上
に新しかつた
ことがわかつ
てきました。

この頃、詩
を作り、それ
にあわせて画
を描いて詩を
書き入れる中
国の文人画
が、日本にお

いても描かれ始めていました。それま
では、画の賛は禅僧や公家などが書き
入れるもので、絵師自身が書くことは
ありませんでした。その文人画を日本
で大成したのが池大雅ですが、二十三
歳年上の俊明が先んじて、絵師であり
ながら詩や書にすぐれた知識人だつた
のであり、だからこそ若き大雅が俊明
に書画を贈つたのでしょう。俊明は、
書と画をあわせたもの、また書のみ
の作品も多く残しています。

俊明の画自体は、文人画に分類され
るものではなく、三十代のとき江戸で
学んだ狩野派や、そのあと京都で入手
したらしい中国や日本の古画を独学し
て、独自の筆運びや造形を築いてい

たものです。面長な人物像など特徴的
な描き方が見られるほか、輪郭線を用
いずに形を表す没骨技法の穏やかな山
水や、丁寧に施されたやさしい色彩な
ど、詩書画をたしなみ真摯に生きた俊
明の人柄を感じさせます。それは、伊
藤若冲ら奇抜な個性が開花する少し前
の時代の「新しい」画であり、俊明の
没後まもなく出版された人名辞典で
は、「一家ヲナス」、つまり独自の画境
をひらいた絵師として俊明が紹介され
ています。

新潟が誇る絵師五十嵐俊明の、県内
外から集めた作品の数々を、この機に
ぜひご覧いただきたいと思えます。
（なかむら さとな 学芸員）



「富士図」三幅の内 五十嵐俊明筆 個人蔵

学校や教会建築を設計した人物です。
カトリック新潟教会聖堂はロマネスク様式の木造平屋一部2階建てで、建物の特徴づけている双塔は鐘楼です。内部の一般の見学もでき、中に入ると壁面に配された美しいステンドグラスがひときわ目を引きまします。このステンドグラスはイタリア製で、新潟地震で被害を受けた聖堂を平成8（1996）年に改修した際、フランシスコ会から寄贈されました。

かつて聖堂の裏手には異人池と呼ばれる池があり、聖堂と池とが織りなす風景は画題にもなり、名所としていくつもの写真絵葉書が残されています。

閑静な住宅街の中で、異国情緒を感じることができるスポットですので、訪ねてみてください。

渡邊 久美子（わたなべ くみこ 学芸員）



版画「異人池教会」織田一磨 昭和4（1929）年 当館蔵

歴史さんぽ

カトリック新潟教会聖堂

中央区東大畑通1

榎谷小路から海辺へぬける道を進み、脇道に入ると、2つの立派な塔を持つ白亜の聖堂がたたずんでいます。これはローマ・カトリック教会の新潟司教区の司教座聖堂で、スイス人建築家マックス・ヒンデル（1887～1963）が設計し、昭和2（1927）年に献堂されました。ヒンデルは北海道帝国大学のドイツ語教師だった義弟ハンス・コラー（1881～1925）の勧めで、大正13（1924）年に札幌に移住し、大正から昭和初期に日本各地の



カトリック新潟教会聖堂

おすすめの1冊

『世界美術双書008 日本の南画』

中国の文人は江戸時代の人びとの憧れでした。江戸中期以降、その絵画理論に学び、日本独自の文人画（＝南画）が展開しました。本書はその全貌をコンパクトに、分かり易く書いています。初めに中国の文人画や理論、中国絵画史との関連、日本絵画の一八世紀の状況、名称の検証など、南画とは何かが述べられ、その後に重要な人物を時代順に紹介しています。池大雅らによりいかに「南画」が大成され、関西、関東で広がり、終焉したかが、過去の論文も踏まえて書かれますが、初めての人も理解できるように細かい配慮が行き届き、平易な語り口で南画の世界へといざないます。著者は池大雅を中心とした南画の日本屈指の研究者として新潟大学で教鞭をとりながら、越後近世絵画の研究や調査も行い、退官後は新潟県内の文化財調査にも貢献しました。当館で開催中の「五十嵐俊明」展では、新潟での集大成として、調査から企画、監修で「尽力いただきました」。

（大森 慎子 学芸員）



武田光一 著
東信堂 発行
2000年7月

みなとぴあ白根絞り展

みなとぴあでは、来年一月十六日から一月三十一日まで企画展示室を会場に「白根絞り展」を開催します。今回は、昨年当館の「布とむかしのくらし展」でご協力いただいた縁で、サークルしろね絞りの方々がこれまで制作してきた作品を展示します。

「絞り染め」とは布を糸でしばって染料に漬け、しばった部分に染料が入らず白く残ることで模様を形作る、布の染め方の技法です。しばり方を変えることで、鹿の子どもの毛皮模様のような「鹿の子絞り」、クモの巣の模様のような「手蜘蛛絞り」といった模様ができます。新潟市南区の白根で絞り染めが盛んになった背景には、中ノ口川に面していて染め物に用いる水が豊富であり、また白根近傍の村々で原料となる木綿の栽培や、それを元にした布（白木綿）生産が盛んであったことがありました。白根では江戸時代後半の文化五（一八〇八）年の絞り染めの記録が確認でき、天保年間（一八三一〜一八四五年）に絞り染めの一大産地である尾張の鳴海絞りの技法が伝来するなどして、改良が加えられていきました。幕末の元治元（一八六四）年刊で、越後の名産品などを記した『越後土産』初編にも白根絞りの名が見え、幕

末までに特産物として知られるようになりまし。明治時代には生産過程が効率化されていき、白根で布は織らず、他所から白木綿を仕入れて染めるのが一般的になったようです。残念ながら絞り染めのみの数値はわかりませんが、緋染めも含む白根町の染め物生産量は明治時代末には年六〇から七〇万反にまでなり、この時期が最盛期でした。大正九年の戦後恐慌以降不況の時代が続く、昭和六年の白根大火も絞りの生産に大きな打撃を与えました。戦後も生産は行われましたが、生活の洋風化で白根絞りの需要は低下し、昭和三十年代には生産が途絶えました。

白根絞りは長く途絶えていましたが、昭和六十三（一九八八）年に地元女性がグループ「ふきのとう」を結成し、白根絞り復活の活動を始めました。かつての生産者へ聞き取りなどを行い、ついに白根絞りを復活させたのです。平成五年には白根絞りの制作技法が白根市無形文化財に指定されました。現在、白根絞りを復活させた「ふきのとう」は「サークルしろね絞り」に改称し、毎年制作講座を開催して新規参加者を募っています。白根絞りの技法を伝える努力が現在も続けられているのです。

伝統的な白根絞りの柄は三浦やたら絞り、鹿の子絞り、柳しほりなど一つの柄のみを用いますが、現代の作品はさまざまな絞り方を組み合わせて模様を形作るのが特徴です。模様を組み合わせる、と言うのは簡単ですが、模様をどのように絞るのか、布の素材や厚さをどうするかなど計画をたて、それに基づいて一つ一つ布を手作業でしばって完成させていく必要があります。また、鮮やかな藍色は染めただけでは出ません。染めたうえで風に当てて藍を酸化させる必要があります。一度だけではなく、平均四〜五回程度くり返す必要があります。染め上がったら糸をほどきますが、これもまた一苦労です。今回展示するような大きな作品の制作には完成まで一か月半から二か月を要します。こうした細かな手作業により、花や文字、幾何学模様などが藍色の生地に鮮やかに浮かび上がります。



白根絞り(手蜘蛛絞り、サークルしろね絞り所蔵)

絞った状態の布(サークル白根絞り所蔵)

参考文献『白根市史』（通史編、一九八九年）
（田嶋 悠佑 学芸員）

俊明と湊祭り

「錦帆宝輿陸船車 欸乃流吟 邊里間 纜槳送迎千万灯 天孫 天上河渡初」

五十嵐俊明が漢詩集「穆翁漫筆」に「湊神宝輿」と題して記した詩です。新潟の湊祭りを詠んだ詩です。「高貴な神様の乗った船神輿、舟歌が町中をめぐり、船を送迎する千万もの灯り、織女が天空の川を渡り初める」といった詩でしょうか。漢詩文の素養も詩心もないので何とも拙い要約です。正確にいつの詩かは不明ですが、十八世紀中期の湊祭りの様子です。幕末と同様に、御座船が巡行し、舟歌が唄われ、灯りが溢れていました。

同じ頃、宝暦十二（一七六二）年、播磨高砂（兵庫県高砂市）の三浦迂斎が俊明を訪ねます。ちようど七夕で、迂斎も湊祭りの様子を「東海済勝記」に記します。「灯火甚多し。一番より廿二番まで組々ありて、祇園会などのごとく壯観なる事なり。七夕祭のかばかりにぎハシキハ、よそに聞なれぬならはしにこそ。」と、祇園会のように組ごとに出し物があったことも書いてあり、「壯観」「にぎハシ」「よそに聞なれぬ」とほめちぎっています。



「あまのてぶり」湊祭り(部分)

迂斎が賑やかさに注目するのと対照的に、俊明はどこか冷静です。題「湊神宝輿」に示されるように、湊祭りを神事として見ています。実は詩には註があり、「郷人以七月七日年々祭湊神、惜未委祭祀之礼、辺地之俗卑陋無可言、後之君子希正之」と記されています。つまり「祭祀之礼」は十分でなく、田舎の卑俗な習わしで、後世の「君子」が改めてほしいと言っています。湊祭りは、住吉神社の祭事でしたが、本来は、俊明や迂斎が「天孫」「七夕祭」と記すように、日本海側各地で行われていた「ねぶりながし」という七夕の習俗でした。そのため神道の儀礼に沿わないものだったのでしょう。「湊神」の神事と考える俊明には、正しくない卑俗なものが見えていたようです。こんな生真面目さが俊明の絵にも貫かれています。五十嵐俊明は会期残りわずかです。御見逃しなく。

収蔵資料紹介

寄木団扇 伊藤小平作

明治二十三（一八九〇）年に東京上野で開催された第三回内国勸業博覧会での褒状授与作と伝わる品です。この作品は新潟の三大財閥である齋藤家の分家で所蔵されていたものでした。

蝙蝠をモチーフに趣向を凝らした作品で柄の部分は黒竹と白竹を使い分けており、表面と裏面とで印象がガラリと変わります。ガラスケースに収められており、団扇としての使用跡は認められません。工芸品として大切にされていたようです。

作者の伊藤小平はその後も、第四回（明治二十八年於京都）、第五回（明治三十六年於大阪）の内国勸業博覧会へ複数の作品を出品するなど、国内外の博覧会や共進会などに寄木細工の作品や家具類を出品しました。明治二十六年のシカゴ・コロンブス万国博覧会では入賞、三十三年のパリ万博では銅賞、三十七年のセントルイス万博では金賞を受賞しています。また三十四年に新潟市で開催された一府十一県連合共進会でも銀賞を受賞するなど、その技術は内外で認められていました。

明治二十六年十一月二十二日付の新潟新聞はコロンブス万博出品の



（藍野 かおり 学芸員）

寄木団扇が一本十五円で売約されたことを伝えています。同記事は同博覧会出品された竹細工の茶碗が四円、朱泥花瓶が二円で売却されたことをあわせて伝えており、伊藤の寄木団扇の工芸的な価値が高く評価されたことがわかります。

作者の伊藤小平については内国勸業博覧会の出品地記録から古町通十一番町、当作品に付属する紙片から礎町、「越佐趣味の人々」より、昭和八（一九三三）年には東中通に居住していたことがわかっています。それが、それ以外の事は分かっていません。